

Bonner-Korpus を用いた接続法の研究

— 形態論的な問題 —

工藤 康弘

0. はじめに

ドイツ語史の古い言語段階では主文と接続法を用いた副文の間に同じ時制を用いるという規則があった。すなわち主文が現在形の場合は副文に接続法現在形(=接続法1式)が現われ、主文が過去形の場合は副文に接続法過去形(=接続法2式)が現われる。この規則は歴史の経過とともに崩れていき、現代では主文の時制とは無関係に、副文には接続法現在形も接続法過去形も現われ得る。時制の一致がいつ、あるいはどのような経過で崩れていったのか、またそれはドイツ語にとってどういう意味を持つのかを明らかにすることが本研究の最終目標である。先に関西大学『独逸文学』53号のマルジナリア「国際ゲルマニスト会議(2010)に向けて: Consecutio temporum und Konjunktiv – untersucht an Texten des 16. Jahrhunderts」(2008、93~98ページ)において、筆者のおおよその構想を述べた。本研究ノートは、その後の分析で出てきた問題点、とりわけ形態論上の問題点をまとめ、今後の考察に役立てようというものである。

1. 資料について

時制の一致の崩壊がある時期に突然起こるということは考えにくく、初期新高ドイツ語期を通じて、場合によっては18世紀以降、現代に至るまでを射程にいれた通時的研究が必要になるが、まずは16世紀の状況を共時的に明らかにしたい。資料としては Bonner-Korpus を用いる。16世紀に関しては10個のテキストがデジタル化されており、現在まで2個のテキストを分析している。Bonner-Korpus のテキストには書かれた、

あるいは印刷された年代や地域に関する情報を示す番号がふられており、本稿では2個のテキストをそれぞれ「テキスト145」「テキスト155」と呼ぶことにする。なお本稿ではデジタル化されたテキストをそのまま用いる場合は、すべて大文字で記され、さまざまな記号が付されていることを断わっておきたい。

テキスト145は Johannes Mathesius による詩篇とイザヤ書の注釈書で、1587年上部ザクセン地方のライプチヒで出版されている。注釈書という性格上、物語のテキストと違って複合文では現在形主文が比較的多い。テキスト155は Johann Gropper による宗教的な論文で、1556年ケルンで出版されている。方言の区分で言えばリプアーリ方言である。このテキストもその性格上、現在形主文が多い。

2. 形態論的な問題（総論）

統語論的な問題を論ずる際、形態論的な問題を解決しておかなければならない場合がある。同じ統語論の分野でもたとえば語順を分析する場合は、形態論的な問題に直面することは少ない。これに対して接続法を分析する場合、当該の語が接続法なのか直説法なのかという問題が出てくる。現代語では、たとえば *er machte* は *Modus* が曖昧なので、「接続法としては扱わない」といった研究者独自の基準をもうける必要がある。統一的な標準語が確立されていない初期新高ドイツ語の場合はこれに加えて、テキストの著者がある語を接続法として使っているかどうかをあらかじめ明らかにしておかなければならない。10個のテキストを分析するには、10個のテキストそれぞれの形態論的な特徴を調べておく必要があるのである。以下では2つのテキストについて、形態論的な問題をいくつか取り上げる。

3. テキスト145

3.1. 語末音消失の状況

先に *er machte* が接続法か直説法かということに触れたが、初期新高ドイツ語では *er macht* が現在形か過去形かという問題がある。ドイツ

語史を通じて語末音消失 (Apokope) と語中音消失 (Synkope) という現象が絶えず見られ、それが文章語に現われる場合とそうでない場合がある。方言による違いもあり、総じてドイツ南部には音の消失した語形がより多く見られる。テキスト145には \$HOFPE、\$HELPE、\$VERMAHNE、\$WERDE (\$ は動詞の標識) といった語形が見られ、語末音が保たれている。ちなみに \$FRAGET、\$LIESET、\$SAGET といった語形もあり、中部ドイツ特有の語中音が見られる。以上のことから、テキスト145では語末音消失は少ないと考えられ、たとえば *er macht* が過去形である可能性は低いと言える。このことは時制の一致を考察する際に、主文の時制を把握する上で重要な判断基準となる。

3.2. wurde

werden の変化形についてテキスト145に大きな問題点はないが、テキスト155と比較する意味で簡単に述べておく。過去時制に関しては単数形のみ現われ、直説法が \$WARD、接続法が \$WU<ERDE である (U<E は Uウムラウトと考えてよい)。

3.3. tun, haben

tun と *haben* の過去時制に関して、初期新高ドイツ語では中高ドイツ語と同様、直説法と接続法が同じ形である可能性があるため、各テキストごとに確認しておく必要がある。テキスト145では、動詞の変化形としての *tat* または *that* は現われない。*thet* が3回現われ、いずれも直説法過去形と解釈される。接続法と解釈される語形はたまたま現われなかったが、*tun* に関しては言語体系上、過去時制に関して *Modus* の区別がない状態にあると言える。

haben の過去時制に関しては *hatte* と *hette* があり、機能上も直説法と接続法の関係にあるとあってよい。

3.4. wollen, sollen

初期新高ドイツ語期の *wollen, sollen* で注意すべき点の一つに、ウムラウトした語形 *wöllen, söllen* が接続法か否かということがあるが、テキスト145ではウムラウト形が現われないので、そうした問題は生じない。

3.5. sein 動詞

初期新高ドイツ語では sein 動詞のうち、特に sein という語形が現代語の直説法 (sind) と接続法 (seien) 双方の機能を持っていることがあり、テキストごとにあらかじめ調べておく必要がある。テキスト145 は現代語に近い体系を持っており、直説法 1・3 人称複数現在形はほとんどが \$SIND であるが、\$SEIN をこの用法に用いていると解釈される例が 2 つ確認された。また \$SEIND が一例あり、\$SIND の異形と解釈される。\$SEIN の多くは不定詞として現われるが、上のように直説法現在形と解釈される場合があるほか、さらに接続法現在形 (現代語の seien) と解釈されるものが 3 例ある。

以上のように、sein 動詞に関しては同じ sein という語形の Modus が曖昧な場合がある。時制の一致の研究では曖昧さを避けるために、接続法であることが明らかな語形だけを分析の対象とするのが望ましい。ただ、「接続法であることが明らかな語形」と「曖昧な語形」を容易に区別できるのは現代語だけである。ときには用法を解釈することで動詞の Modus を確定することも必要になってくる。語形から出発してその用法を明らかにしようとしているときに、先に用法を推定して語を形態論的に位置づければ、循環論に陥る危険性がある。しかし最終目標である用法だけでなく、出発点である語形も多様で曖昧な初期新高ドイツ語では、双方からアプローチすることも必要であろう。

4. テキスト155

4.1. 語末音消失の状況

\$HABE、\$GEBE、\$WERDE、\$WERE、\$THETE といった語形のほか、弱変化動詞の過去形として \$LHERETE、\$WEISETE、\$THEILETE などがあり、総じて語末音は保たれている。以下の例には過去形に混じって \$DANCKET という語末音を欠いた語が現われるが、これは聖書からの引用であり、著者の言語とは異なるとみてよい。

\$*NAM +N *JESUS - N DAS +*BROT/ VND \$DANCKET/ VND
\$BRACHS/ VND \$GAB ES SEYNEN +*JUNGERE< - / VNND
\$SPRACH 「イエスはパンを取り、感謝し、それを割り、弟子たち

に与え、言った」(< の部分は n を補う)

4.2. wurde

werden の変化形として ward, wurde(n), würde(n) のうち、テキスト155 に現われるのは wurde(n) だけである。これが直説法なのか接続法なのかは、用法からある程度推し量ることができる。wurde(n) の用法で多数を占めているのは、次のような不定詞を伴ったものである。

SO \$WURDE DAR VS'Z \$FOLGE< - 「このことから以下のことが導き出されるであろう」

werden + 不定詞が起動相から未来表現へ転換したあと、直説法過去形 の wurde + 不定詞は過去未来の表現として発達することなく、消えていった。従って上の例のような \$WURDE + 不定詞は接続法 (= nhd. würde) と解釈される。難しいのは wurde(n) + 過去分詞という受動態で、この場合は直説法過去形の可能性もあるので、さらに文脈から Modus を推し量る必要が出てくる。

4.3. tun, haben

tun の変化形として tat, that, ta<et, tha<et, tet, thet を検索した結果、thet が3個見つかった。これらはすべて接続法過去形による非現実話法と解釈される。

haben の変化形として hat (hatte, hate, hatten, haben が現われるかどうかを調べるため)、het, ha<et を検索した結果、hatten が1つ確認されたほか、het, hette, hetten が多数現われる。これらの多くは非現実話法の接続法過去形であるが、接続法と解釈する必然性がないものもいくつかある。このことから、基本的に hette(n) が接続法にも直説法にも用いられると言える。このような Modus の曖昧な語形を最初から排除して分析するかどうかは常に迷うところであるが、3.5で述べたように、用いられた文タイプなどから解釈したうえで、分析の対象にすることも必要と考える。なお、hettend という語形が hetten と併置されて現われるケースが一例あり、上記の hatten とともに少数の異形と考えられる。

4.4. wollen, sollen

まず *wollen* と *wöllen* の現われ方を調べるために *wol* と *w<el* で検索した結果、総数では *wollen* が7個、*wöllen* が26個であった。*wollen* が接続法と解釈されるケースは *als ob* 文に用いられた \$WOLDT 一例だけである。*wöllen* は接続法現在形にも接続法過去形にも用いられているが、同時に直説法にも用いられている。また *wollen*、*wöllen* とともに不定詞として用いられている。このようなことから、著者がウムラウト形を積極的に接続法として用いているとは言い難い。またこのテキストには *welch* と *wölch* が併存している。本来の *wellen* が円唇化したと思われる *wöllen* も *wollen* とともに異形として存在していると言える。

sollen においても総数では *sollen* が12個、*söllen* が32個で、ウムラウト形が多い。ただ、両者とも直説法と接続法に用いられており、Modus の区別に利用されているとは言えない。

4.5. sein 動詞

テキスト145と同様、接続法複数現在形と直説法複数現在形の状況を見てみたい。まず *sind*, *seien* という語形は現われない。多く現われるのは *seind* と *sein* である。*seind* はその用法からして直説法 (= *nhd. sind*) と言ってよい。*sein* は不定詞が多いが、中には定動詞もある。これが直説法なのか接続法なのか判断が難しい。*sprechen*, *gedenken*, *bedenken* の内容を表わしたり、接続法であることが明らかな *sei* とともに用いられるといった場合は接続法と解釈することが可能である。しかし接続法と解釈する積極的な理由が見つからない場合は、直説法として上記の *seind* と機能的に重なることになる。厳密さを求めるのであれば、*sein* を分析の対象からはずし、*sei* のような明らかに接続法とわかる語形だけを扱うのが望ましい。しかし3.5で述べたように、用法から接続法と判断する道も残しておきたい。

5. まとめ

これまでの調査から、テキストによって形態論的な状況が異なるということがわかった。接続法の研究で言えば、Modus の区別が明白かどうか

かはテキストごとに異なる。従って分析の対象となる接続法を抽出する際に、統一的な基準をもうけることは不可能である。個々のテキストごとに形態論的な状況を勘案し、そのテキスト独自の基準をもうける必要がある。